

## 第2分科会 中学校

# 考え、議論する道徳の授業づくりと評価について

～学級経営と日々の授業実践を通して～

北海道教育大学附属釧路義務教育学校後期課程 教諭 三光楼 正洋

### 1. はじめに

中学校では、2019年度から道徳が教科化された。教科化されるにあたり、他の教科のように、数値で評価をするのは馴染まないとして、「特別の教科」という形をとっている。そして、評価は教師側において「指導の目標や計画、指導方法の改善充実に取り組むための資料となるもの」児童生徒側において「自らの成長を実感し、意欲の向上につなげていくもの」とされている。このように、指導に生かされ、児童生徒の成長につながる評価でなければならない。学習指導要領でも言われている「指導と評価の一体化」のために、評価の意義や評価の基本的態度について教師が研修を深め、普段の授業において意識的に取り組んでいき、「評価のための授業づくり」ではなく「評価できる授業づくり」をしていくことが求められる。

本論では、道徳科の授業構築と評価について、今年度実践している取組を基に紹介していく。

### 2. 学校の取組

#### (1) 全校研修の活用

道徳教育の全体計画は、学校における道徳教育の基本的な方針を示すとともに、学校の教育活動全体を通じて、道徳教育の目標を達成するための方策を総合的に示した教育計画である。

本校で実施している教研式道徳性アセスメント HUMAN の結果をもとに、学年の重点指導事項を決定し、全体計画作成に生かしている。

また、振り返りにおける1枚ポートフォリオ(図1、2)はここ数年活用している。評価時に生徒の変容を見とったり、生徒が今までの授業を振り返ったりする際に有効なものであることは、全校研修時に教員の共通認識として持つことができている。また、記入の際は、「この時間で一番考えたことについて振り返ろう」とい

う全校共通の指示で記入している。

このポートフォリオをさらに、有効的なものとするべく、ポートフォリオをデジタル化し、生徒の学びの蓄積、内容項目ごとの3年間の変容を見とることができないか、現在、研究部を中心に模索中である。これらの意見を集約するためにも、全校研修を活用することが重要となってくる。

道徳振り返りシート

年 組 番 氏 名			
シ			
シ			
シ			
シ			
シ			
シ			
シ			
シ			

図1 本校で用いている道徳振り返りシート

資料	誇りを閉じ
4/13	今までおぼろげておいたけれど、今ついでに中学校は、ってさっきからあらためて考え直さなければいけません。
資料	今度は私の番だ
7/1	今の社会は他人の失敗は許さず自分も失敗するよ。これは自分も失敗したから失敗を許さずにはいられない。失敗を許さずって社会が望んでいるよ。

図2 実際の生徒の振り返りシート

#### (2) 年間指導計画の見直しと授業の蓄積

本校では、道徳が教科化される前から授業資料の蓄積は行ってきたのだが、教師の思いの分だけ教材や資料が増え、実際に授業をするときにどれが効果的なものなのかを探すだけでも時間がとられることがあった。しかし、教科化にあたり、使用教材は基本的に教科書を用いるこ

ととなり、教科化初年度は年間指導計画も作成し直すと同時に、今までの教材を取捨選択し、目指す生徒像の実現のためのよりよい年間指導計画になるよう努めた。そして、年間指導計画は、一度作成して終わりではなく、学校行事や学年の実態に合わせて、毎年見直しをしている。使用教材は、基本的に教科書であるが、内容項目によっては不足する場合もある。その場合は、今まで本校で行ってきたものを用い、補うようにしている。また、実践した授業の資料は、指定されたフォルダへ保存し、教師の共通の財産として蓄積を行っている。特に、教科書教材は、毎年大きく変わるものではない。一つの教材を教師がどのように授業に用いたのかを記録として残すと、自分には無い視点など様々なことがわかり、非常に参考になるものである。

### (3) 学年の枠を超えた日常の交流

前述した授業記録の蓄積にも関わってくることであるが、文字化された記録を読むだけでは、実際の授業の雰囲気伝わらないこともある。また、記録は残すが、必ずしも上手くいくものだけが残っているわけではない。そして、悩み、苦しみながら生み出した授業は記憶に残るものであるが、次年度同じ授業を行うとは限らない。自分は、運よく担任を1-2-3年生のローテーションで持たせてもらい、同じ教科書教材を使うのが2回目となったため、以前の授業を改善する方向で授業構築を行うことができた。(詳しくは後述する。)しかし、教師によっては初めて受け持つ学年となる場合もある。このような時、不安を解消できる一つの方法が「以前の授業者に尋ねる」ということである。授業の進め方は人それぞれであるが、授業を通して生徒へ学ばせたいねらいや目標は同じである。そして、限られた勤務時間を有効に活用するためにも、(自分なりの案を持った上で)以前の授業者に聞いてみるということがとても大切なことであると感じる。本校職員は20~40代の年齢構成であること、授業に対し日々交流する雰囲気があること、少しでもよい授業を行いたい職員気質があること

など、幸いにして「わからないことをどんどん質問しあえる」雰囲気のある職場である。これは、学年内の枠に限ったことではない。先に述べたように、日々の生きた実践内容をもとに交流ができるので、教える側も教えられる側も非常に互いのためになっていると感じている。自分自身も、過去の資料をもとに、他者へアウトプットすることで、授業の成果と課題を改めて振り返ることができた。このようなことが、研修という場を設定しなくても行うことができていることは、自分の力を高めるために適した環境であると感じている。

### 3. 考え議論する道徳の授業づくり

考え議論する授業の作り方について、現在自分が行っている実践事例を紹介する。

#### (1) 授業づくりについて

教科書教材を用いて授業をする際、まずはその教材が設定している指導内容を確認する。確認後、その視点を持って資料を一読し、自分が生徒とともに一番考えたい場面を設定する。その場面を「中心場面」とした場合、その中心場面に行き着くまで、資料をどのように用いるかを考える。

また、教材が設定している指導内容と、自分が教材を読んだときに感じた指導内容とが一致しないことがある。このことは、教材を素直な心で読む生徒にも同じことが言えると考え。教師が考えさせたいことと生徒が感じることに差異が生まれることを頭の片隅に入れ、教材の分析を行うことが肝心と考える。例えば、「D(19) 生命の尊さ」を指導内容とした教材は、それを支える「C(14) 家族愛」に視点がいく場合がある。自分が感じたことと教材が設定していることとを関連させながら分析し、「子どもと共に考えたい場面」を吟味するようにしている。このように指導内容を「指導」という意識ではなく、「生徒と共に共に考えたい場面を見つけ、共に考える」という意識で授業を構築するようにしている。その際、私は「道徳メモノート」を作成し、前述した授業記録の蓄積を個人

的におこなっている。下の図3、4は東京書籍2年生の「私は14歳」の授業を考えたものである。図3は令和元年度に、図4は令和4年度に考えたものである。令和元年度は「自分らしく生きる」ことはどんなことなのかを考える1時間として構築した。指導書も参考にしつつ、つまりくことは必要か、成功体験だけでいいのかという問い返しも入れた授業とした。生徒から「つまりく経験も自分のものとしていく中で、自分らしさを見つけていきたい」という振り返りがみられた。この時の授業の流れを考慮しながら構築したものが図4令和4年度の実践である。登場人物の心情曲線を用いることで、生徒が教材のイメージを掴みやすかったことから、令和4年度も同じように実践したところである。以前は発問構成がわかりにくかったため、真ん中に中心場面で考えたいこと、右側に今後の自分の生き方につながることを考える発問構成となるようにした。授業構築していく中で、「自分らしく生きること」と「わがままに生きること」は何が違うんだろう？という自分自身の疑問が生まれ、生徒と一緒にその部分も考えてみたいと思い、メモに残すこととした。図4中では、左側にあるが、本筋とずれるかと思ひ、授業の最後に少し触れる程度とした。生徒からは、「自分らしく生きることは大切だけど、周りとの関わりも考えながら自分らしく生きたい」と周りとの関係性も考える振り返りが見られた。

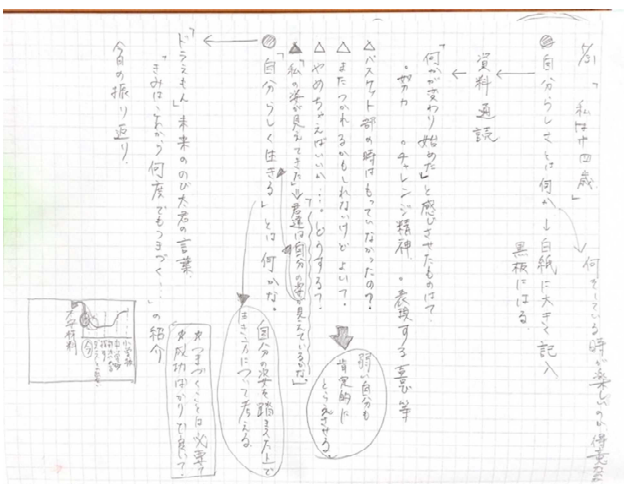


図3 令和元年度の実践

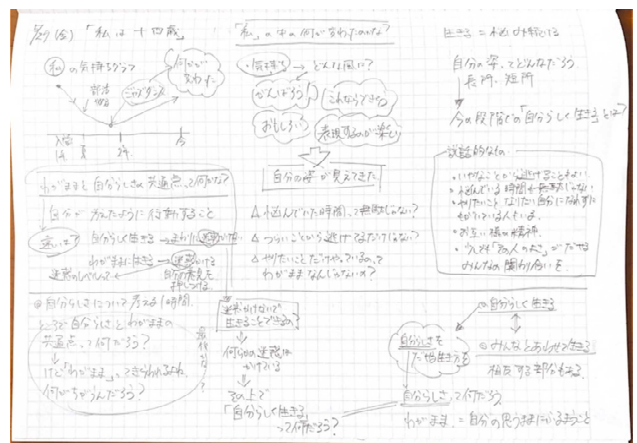


図4 令和4年度の実践

## (2) 授業構築、評価の取組を振り返って

評価は生徒が自分の考えを発表したことに対する教師のフィードバックである。本音を話してもらいたい、という教師の思いはあるが話してくれない場合がある。これは、生徒にとって教室が「安心できる環境」となっていないためと考える。「こんなことを発表したら馬鹿にされる」、「嫌な雰囲気になるから発表しにくい」という学級であれば、本音で話すどころか発言すらなくなってしまふ。生徒同士の横のつながりと教師と生徒の縦のつながりを作るためにも、安心して自由に自分の考えを発表できる場としての道徳の時間が存在しなければならない。そして、安心できる環境づくりを、日々の学級経営と道徳科を含めたすべての授業で作っていくことが「本音で議論しあい、議論する道徳の授業」につながると考え、以下の3点のことを実践してきた。ここでは特に①・②について詳しく説明する。

### ① 教材を通して、生徒自身の思いを発表する。

いきなり「自分の思いを発表してください」と言われても、生徒は学級内での関係性がない中ではありきたりのことしか言わない。まずは、教材の中の登場人物を借りて自分の考えを発表できればよいだろう。そのための手段として、次のようなことを行ってきた。

#### A. 役割演技（生活経験とつなげる）

東京書籍中学3年の「缶コーヒー」では、教師も演者の1人となり、役割演技を行った。生

徒には、資料中のコーヒーをこぼされる役を行ってもらった。実践時は3年生であり、活発に自分の意見を話せる環境であった。「自分だったら言い返せそうかな」という問いに対して「できそうだ」という生徒と共に教科書の一場面を演じてもらったところ、「本当の場面ではなかったけど、言い返すとしたらすごい勇気のいることだと感じた」と、体験を通すことで、実際の行動の難しさに気づいていた。また、日頃からちょっとした役割演技を授業に取り入れ、班内で行わせることにより、演じることへの抵抗感が徐々になくなってきていると感じられた。考えと行動とを一致させて捉えるためにも、有効な手段であると考ええる。

## B. 視点の変化

基本的には主人公側の視点で授業を進めることとなるが、ある程度話し合いが進んだ時に第三者の視点で「主人公の行動について、周りの人はどのように考えるかな？」などの視点を広げる発問を行う。立場を変えることで見えてくる世界が変わり、生徒の視野が広がることにつながる。

## C. 子供の意見をつなぐ

教師から生徒の意見に対し、「望ましい」「望ましくない」と意見を振り分けていくと、生徒は「こう答えておけばいい」という無難なことしか言わなくなり議論にはならない。「なるほど。他には？」と生徒の意見を引き出し、「～についてはどう考えるの？」と問い返す。そして、「このことについてもう少し教えてくれるかな？」などを伝えながら生徒の意見を否定せずにつなぐことで、安心して発表できる環境が作られていくと考える。

## ② 学期ごとに振り返り用紙を用い、印象的だった教材について記入する。

一枚ポートフォリオでは、その時間ごとの振り返りを記入してもらおうが、本校で採択している東京書籍の教科書には、学期ごとに振り返られる用紙もついている。

振り返る際の足がかりとして、一枚ポートフォリオを用いるが、印象的＝記憶に残っている

授業であることから、生徒にとって最もよく考えることができた授業であると考え。また、自分が作っている授業構築ノートと合わせることで、どのような流れが生徒にとって印象的だったのか、また、記述がない教材の際は改善が必要であることがわかるので、授業と評価の一体化を図ることができると考える。

## ③ ICT機器などを活用し、生徒の振り返りを相互評価する。

## 4. 取組の成果と課題

成果については、前述の自身の取組の中で記述してあることが主なものである。課題としては、授業の蓄積は行っているものの、実践後の教師の反省が残っていないことが多いことである。生徒の思考がはたらいた発問、逆にはたらかなかった発問など、よかったこと・改善点が蓄積されていくことが、より学校全体で道徳科の授業改善に取り組むことにつながってくると考える。どんなことにでも言えることであるが、自分1人で悩まず、みんなで考えることができる職員室の風土があることで、職員も「安心して相談できる環境」となると考える。

## 5. おわりに

教材はきれいに終わるものが多い。生徒も十数年という人生ではあるが、その経験を活かし、「そんなにうまくいかないよ」と教材を批判的に見ることが少なくない。批判的に考えるであろう授業場面において、「教材ではうまくいっていただけ、実際だったらどうする？」というように、実生活に立ち返られるような発問を入れることにしている。自分自身の実践を蓄積することで、教師自身が「ん？」と思う場面と内容項目とをすり合わせるができるようになってきていると実感している。そして、指導する内容項目と照らし合わせながら「こんなことを聞いたらどんな反応があるかな？」などと、少しでも自分が楽しみながら授業を作ることで、生徒と共に思考し、議論し合える道徳の授業を構築・内省し、自身の力を高めていきたい。